

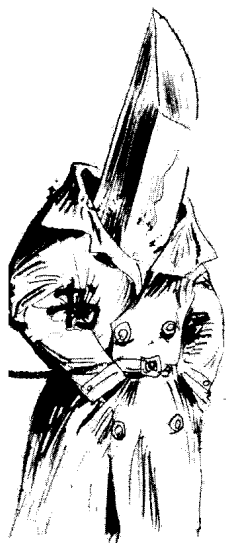
純文学の素

赤
瀬
川
原
平

こーゆー本ばかり読んでいると
芥川賞作家になってしまいます。
買うだけでじゅうぶんです。
—— 糸井重里

純文学の素

赤瀬川原平



白夜書房

純文学の素

昭和57年8月1日 初版第一刷発行

昭和57年9月20日 初版第二刷発行

著者 赤瀬川原平

発行人 森下信太郎

発行所 株式会社 自夜書房

東京都新宿区高田馬場四―二八―一二

電話(〇三三三七)一四一七六

印刷・製本／日本製版株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

7183 ISBN 4 -938256-35- 5 C 0095

「ヒトラー」の寂しい観客

5

マネキンにされた現金

14

恍惚の宇宙博

24

穴と刃物

33

恐怖の発明

43

省エネの夜

53

自宅の悲しみ

63

迎賓館の水

76

赤坂のマツタケ

86

授賞式

96

お正月が怖い人

107

今日の夕刊

118

時計の問題	128
夜の美学校	137
自宅の黙示録	146
感動の一日	156
自宅が動いた日	166
雨樋の小さな傾き	175
把手の先の部屋	185
卑怯者の秋	199
うちの十万	210
辺境を探る	220
スーパー・ラジカル・デラックス	233
もらった日	244

アメリカからの電話

254

超芸術を探る

264

ネギの切口

274

昼下りの総理官邸

283

出刃包丁授与式

293

夏ハデ

303

自宅で食写

312

うちの家宝

322

私、プロレスの野次馬です

333

露骨な宴会

344

あとがき

353

装幀 平野甲賀

挿画 赤瀬川原平

「ヒトラー」の寂しい観客

極東セルフ文化圏の一部読者の間で非常に有名だといわれるミスター・スウェイイからとうとう電話をいただいた。

「ハロウ、ミスター・アカセガワ？　オーイエー」

「あ、スウェイイさんね、どうも。ぼくもオーイエー」

「アツソー。ジツハ、コンド……」

じつはこんど、ルポルタージュをせよと、そういう用件なのである。

「あ、ルポですか。ルポというところどこかに出かけて行って、見て書くわけですね。やはりエロ関係なんでしょうねエ、テーマは」

「イヤ、マア……」

「そうですか。エロというのは見るのはよくても書くとなると難しいでしょうね」

「イヤ、ベツニエロジャナクテモ、ナンデモイインデスケド……」

「いやあそうはいっても、お宅は専門誌なんですよ、エロの……。やはりあの、専門誌に書くとなると緊張しますよ」

「イヤ、オーイエー、そんなにカタクナラナクテモ、ルポなら何デモイインデスケド」

「いやそうはいってもしかし、何をルポすればいいのですかね。ぼくはもうこのところオツクで

あんまり外に出ないし、トルコとかチャパレーとかいったつてもう専門家がちゃんといふのだろうし……」

「イヤ、ムシロセンモンカジヤナイヒトニカイテモラッタホーガ……」

「いやいや、そうはいつても、オタクはやはり専門誌ですからねエ、いいかげんなこと書いたら読者に怒られちゃいますよ。ぶるっちゃいますよ」

「イヤ、アノ……、ベツニセンモンシトイウワケジャ、オーイエー……」

「何かこの、外に出かけないで書けるルポはないですかねエ。家にいたまま出来るルポ。自宅で出来るルポ。あ、これどうですかねエ、自宅で出来るっていうのは。どことなく猥褻みたいでいいんじゃないですか」

「ア、ソレ……」

「昼は小さく折りたたんで持ち運び自由、なんて、そんな言葉につづきますねエ、自宅で出来るというのは……」

「エ、チョット、ナニソレ？……」

「いや、その専門誌にのっているような広告で見かける文句ですよ」

「マ、トニカクジタクデ……」

「しかしよく考えたら、自宅にはあまりエロは転がっていませんねエ。やはりダメかな、自宅では……」

「イヤ、ダカラベツニエロジャナクテモ、ウチウェイガザツシデスカラ……」

「え？ 映画雑誌なんですか？」

「ええ、ですからあまりエロということにこだわらずに……」

そういうわけで、私は自宅に出かけていくことになったのである。自宅で出来るルポ。自宅の中の



ルポルタージュ。私は自分に変装し、自分になりすまして、自宅の中に深く潜入した。これは画期的なルポになるだろうという直感があつた。いままでにトルコ潜入記とか、バクチ場の潜入記とか、精神病院の潜入記とかいうのは沢山あるけど、自宅潜入記というのはまだどの雑誌でも読んだことがない。これは何故かというと、自宅に潜入するのが非常に困難だからである。自宅の入口で何とか自分になりすましたと思って潜入しても、たいていは自分に見破られてしまうのだ。あるいは自宅の入口くらいはまんまと通過することができたとしても、いつかは自宅の奥地で当の自分に包囲されて、そのまま帰らぬ人となってしまう。自宅とは大変恐ろしいところなのである。

などといいかげんなことを少し書きはじめてみたのだけど、やはり本当は自宅ではどうしようもない。自宅で出来るルポはどうしても小説になつてしまうのだ。小説はやはりルポとはいえないだろう。文学である。純文学。

弱ったな。どうしよう。私は、いや私はもうや

めにして、ぼくは、ぼくは自宅をやめて映画を見に行くことにしました。さっきの電話では映画雑誌だということだから、何か映画を見にいけばいい。それにぼくはいまキネマ旬報という映画雑誌でも「妄想映画館」というのを月に一回経営しているのです。そこで「上映」する「妄想映画」のために、やはり月に最低一、二回はチマタの映画を下見にいかなくてはならない。そうだ、これをいつしよにしちやえば一石二鳥ということになるではないか。そうすればこつちとすれば一回映画を観るだけですむし、映画の方としても一回観られるだけですむ。

私は「ヒトラー」を観るために有楽町の駅を降りました。昔は「ヒットラー」だったのに、いまはもう「ヒトラー」です。「ツ」というのはもう古いのです。「ツ」なんていつてはねるのは、もうテレビの映らないような田舎でしかやらないことなのです。イタリアの場合でも「ムツソリーニ」なんて頑張っているとかバカにされる。もう世の中のことは全部知っているような顔をして、「ツ」なんかつけずに下の方を向いてタンタンと「ムソリーニ」というのが一番ナウなやり方なのです。イギリスの場合でも「バックینگラム」なんて頑張っているとかバカにされる。これもやはりもう何度も経験しているという顔をしながら「バッキングラム」といえば国際人として通用するのです。

日本の場合もそうです。「ケッコンしよう」なんて頑張っている、たちどころにバカにされてしまいます。かといって「ケコンしよう」などという余計に外人コンプレックスのキザな奴だと思われるよ。この場合ただ「ツ」がなければいいというものではない。結論としては「ツ」を取るだけでなく「リコンしよう」とさりげなくというのが一番ナウなやり方なのです。

とか何とか、私は「ヒトラー」を観るために有楽町に降りました。目指す映画館は丸ノ内松竹です。いや「丸ノ内ピカデリー」かな？ こまかいことは忘れたけれど、その映画館が近づいてきた証拠に、向こうから赤地に白丸カギ十字の「ヒトラー」のパンフを小脇にかかえた女性が一人で歩いてきます。

どうやら女一人で「ヒトラー」を観てきたらしい。何だろうか、この女は。右翼女？ いやすぐそう単純に考えては間違いのものただけど、ぼくは「あれ？」と思いましたね。何もこんな映画を一人で観にいくことはないだろう。

まアそれはともかく切符売場に行きました。千三百円を出しながら、そうだ、この映画は観たくて観るといふわけではなく、仕事のために観るのだから、半券を捨てずにとつておいてセルフ出版から出してもらおう。しかしキネ旬の仕事にも使うのだから半分キネ旬からも出してもらおうかな？ だけれど本当は仕事を別にしても観たい気持があるのだから、ぼくのお財布からも少し出すとして、えーと千三百円をセルフとキネ旬とぼくとの三者で割ると、三四十二の三三が九……、畜生、割り切れないな。

そんなことを深く考えながら優柔不斷に突立っていると、コートを着た若い女性が一人、さっさと一枚切符を買ってはいっていききました。あ、あれは計算なんかせずに全部自分のお財布から払ってしまったのだな。あれはキャリア・ウーマンに違いない。一人で切符を買ったりして。だけどさつきにつづいてまた女が一人。いくらキャリア・ウーマンだからといっても、ヒトラー、いやヒトラーというのはそんなにいいのだろうか。

映画館の中にはいると、客席はキャリア・ウーマンでギッシリ満員。ぼくはギョツとしました。来るまではひよつとして黒い皮ジャンの暴走族で満員かな、あるいは体育会の黒い学生服で満員かな、と考えたりしていたのだけど、そこは少し足りないインテリ頭の浅ましき、現在の左翼的脳ミソの部分の限界がそのへんにあるのです。客席は一人で来ているキャリア・ウーマンでギッシリ満員。ぼくの鼻孔はもうキャリアの匂いでむせかえりそうです。客席いっぱいに坐っているヘアや下着やストッキングから、キャリアの匂いが胸苦しいほどに立ちのぼり、館内に充満しているのです。これはアン

ネの影響もあるでしょう。キャリア・ウーマンの中でもとくにアンネの人がたくさん来ているのに
違いない。いや別にこれが専門誌だからといって、ことさら迎合的にこういうことを書いてい
るのではないのです。これはルポなのだから、ぼくはただ見たまま、感じたままを書いてだけ……。

しかしもう少し冷静になってよく見てみると、客席は半分くらいの入りのガラン、ガラン。キャ
リ・ア・ウーマンは、ほんの数人があちこちにポツン、ポツン。そうだ、ぼくは感じたままを書いたのだ
けど、ちよつと感じすぎてしまったのだろう。ぼくはキャリアの匂いに敏感すぎたのだ。だけどこ
ういう所ではとくに匂うんだよね、キャリアの匂いが。ムンムンと。これはやはりアンネのせいだと思
います。アンネといつてもタンポンのことではありませんよ。あ、そうだ。読者の皆さんはタンポ
ンなことだと思つてたのですね。うわア、困るんだなア。これだからやはり専門誌に書くのは難し
いんですよ。言葉づかいが。ぼくにはそんなタンポンのことなんかぜんぜん脳裡になかったのに。

ついこの間アンネの展覧会が日本全国を巡回しながら催されて、これがいつも女性客で満員だつた
のです。アンネの展覧会といつても、もちろんタンポンの展示会ではありません。そういう衛生博覧
会的なものではないのです。展示会ではなく展覧会です。憎い憎いドイツの兵隊、鬼のようなナチ
の兵隊にとうとう殺されてしまったあの可哀相なアンネの展覧会です。世界の日記史に残るといわれる
ほどの名日記である「アンネの日記」を書いたその本人の展覧会です。これが蓋を開けてみたら大評
判。アンネといえはタンポンしかしないような戦無の若い女の子が、我も我もとたくさん押しかけ、
会場はまるでタンポンのバーゲン・セールと間違えたのではないかと思うような大混乱……。

別にことさら不謹慎に書こうとしているわけではありません。専門誌に迎合しているわけではない
けど、アンネの問題というのは日本の国情というものがからんでくると非常に難しくなってくるの
です。憎い憎い悪魔のようなナチスの兵隊に殺されてしまっただけでなく、死んでからもなお日本に

連行されて、もう一度差別されなければならないアンネというのが可哀相で、可哀相で、私は涙が二重に流れて仕方がないのです。あんなタンポンは、アウシュヴィッツの強制収容所の中で発明されていたのに違いありません。アンネの差別は、戦前ファッショのドイツから戦後ファッショの日本へと引きつがれてきたのです。ああ、可哀相なアンネ。

「ダッダッダッダッ」

私はヒトラーの演説の声を覚えました。ヒトラーは大口を開けて、タンポンなんか眼中になんといった表情で、どんどん演説をつづけています。客席ではキャリア・ウーマンが、あちらにポツン、こちらにポツンと、一人で坐つて観ています。キャリア・ウーマンはやはりアンネのせいで見に来ていたのでしょう。アンネの力がキャリアをその映画館まで引き寄せているのです。ここに来れば、何かアンネの秘密がわかるかもしれない。だけどヒトラーは、一言もタンポンについては話してくれません。

だけど暴走族は何故観に来ないのでしょうか。私は不思議に思いました。ヒトラーというのはカッコイイ象徴のはずです。カッコイイ制服はたくさん持っているし、サイドカーやベンツもたくさん持っているし、暴力もたくさん持つていて思い切り使っているし、これはやはりどうしても金を払つて観に行きたい……、ということには……、ならないのですね、実際には。暴走族はナチスの格好にしても、ナチスの映画は観に来ないので。暴走族は黙つて映画など観てもしょうがないのだらうと思ひました。彼らのヒトラーは映画ではなく実体なのです。日記ではなくタンポンなのです。キャリア・ウーマンとはアベコベなのです。

そこで映画「ヒトラー」のことだけど、これは非常に面白いものでした。映画というのは無駄なフィルムが面白いのだなア、と思ひました。カメラ・テストやりハーサルのために回したフィルム、それ

がじつに面白いのです。たとえばヒトラーが演壇の上で、演説する時間が来るのを一人で黙って待っているシーン。これは当時の国策宣伝映画としてはまったく無駄な部分なのだと思います。その当時の本命は演説の中身のはずです。その本命の時間が来るまでに準備としてカメラを回していたのでしようが、そういうフィルムが一番生々しくて面白いのです。ヒトラーが生々しいし、会場の空気が生々しいし、見えないカメラマンが生々しい、無意識の全部が生々しいのです。世の中は変わるものです。まさかこんなフィルムが面白くなるだろうとは、おそらくその時のその人々は思いもしなかったことでしょう。

一つ、思わずふき出してしまった場面がありました。いよいよ負けが込んできたナチス・ドイツ軍がパリかどこから電車で逃げるときに、線路の枕木を切りながら逃げて行くのです。枕木切断用の機械を電車の一番後にとりつけて、枕木を自動的にギリギリ切りながら電車で走って逃げていくのです。これはもうマンガというよりほかはない。いやもちろんナチス・ドイツに殺された方々の御冥福は御冥福でお祈りしますが、しかしこんな機械まで発明するなんて、ナチスというのはちょっとヘンです。ヘンな男が集っているのです。いまだったらヘンな男は会社やアパートで白い目で見られながら、

「あの人、物腰はやわらかいけど、何だか笑顔が薄気味悪くない？」

「そうですわね。何を考えているのかわからない感じ。それに四十過ぎても独身だなんて……」

「そうよ、なんだかちよっと不潔な感じ」

「この間は自転車にモーターをつけてオートバイに改造してたけど……」

「手先が器用すぎるのも、ちよっとヘンだと思わない？」

などといわれながら、社会の片隅で小さくなって生きていかなければならないものを、このナチス・

ドイツ軍ではそういうヘンな男が大勢集まり、おおっぴらに変質的発明に没頭していられたのです。これはもうヘンな男というよりヘンな子供ですよ。子供の軍隊です。幼児の軍隊です。だから才能の点では大人がかなうわけがない。子供の発想には遠慮というものがありません。だけど最後は結局、大人の軍隊に負けてしまうんですね。ああ、可哀相な幼児……。

映画館を出ると夜でした。目の前をコートを着たキャリア・ウーマンが帰って行きます。赤地に黒い大きなハーケン・クロイツ、その派手なカタログが買ったばかりのアクセサリーのように似合っています。本人たちもそれを意識しているようです。何か知的にハデな感じなのです。そんなハデを胸に抱いて、キャリア・ウーマンは一人一人、夜道を帰って行きました。

マネキンにされた現金

自宅で出来るとはいったものの、しかし自宅ではやはりルポがなかなか出来ない。そこで突然ではあるが、銀行へ行ってみた。これまでこの本誌の属する業界において、銀行のルポというのはほとんど見たことがない。これはやはり何か片手落ちの感がある。

いや、よく考えたら別に何も片手落ちの感などないのであるが、私はともかく銀行に行ってみた。銀行とはしかし本当はおかしな名前である。本当は金行と言わなければいけないはずなのだ。銀行に出し入れしているのは銀ではなく金である。もちろん物質の金そのものではないが、私たちは銀行に出し入れしているそれを金といいならわしている。

「おい、今日ちよつと金を貸してくれよ」
というふうにいっている。

「おい、今日ちよつと銀を貸してくれよ」
とはいわない。貸し借りするのは金であり、買物するのも金である。金は世の中にたくさん出回っている。だけど銀というのはぜんぜん出回っていない。銀というのは、じつはどこかにゴツソリ隠れているのではないだろうか。

そうだ、男性の股を拠点として伸びている生理機関も金玉という。あれは「銀玉」とはいわない。金玉は世の中にたくさん出回っているが、銀玉というのは見たことがない。銀行があるのに銀玉がな